

わが国の伝統的音楽指導のカリキュラム構成に関する研究

A Study on Curriculum Design of Japanese Traditional Music

八木正一（教育学部・教授）

Shoichi YAGI

Professor, Faculty of Education

1. 研究の背景

2002年の教育課程改訂において、音楽科では日本の伝統的な音楽の指導が強調されることとなった。とりわけ中学校では、日本の伝統的な楽器の指導が義務づけられ、教育現場ではその指導が行われている。この背景には、グローバル化が進む中で音楽を含むわが国の伝統的な文化についてのアイデンティティ構築といった課題があろう。しかし、指導者の不在といった問題とも連動して、伝統的音楽の指導は十分成果をあげているとは言い難い。このような中で、どのようなモデルで伝統的音楽の指導を行うべきかについて大きな関心が寄せられている。さらに、また全体的な音楽科のカリキュラムの中に伝統的な音楽に関するカリキュラムをどう配置していけばよいかについて教育現場の関心は極めて高い。本研究の背景にはこうした状況がある。

2. 研究目的

このような背景のもと、本研究は次を目的として行われた。

- ・わが国の小学校や中学校において日本の伝統的音楽の指導が実際にどのように行われているのかを明らかにする
- ・そうした指導を類型化し、それぞれの問題点や課題を析出する
- ・以上をふまえ、小学校・中学校がそれぞれの教育的環境の中で取り組むことのできる日本音楽のカリキュラムモデル構築の視点を析出する

3. 伝統的音楽指導の類型

調査をふまえて、伝統的音楽指導に関する事例は次のように類型化できることがわかった。

- (1) 地域在住の邦楽専門家を特別非常勤講師などとして位置づけ実技的な指導を依頼する事例
- (2) 地域の民俗芸能の保存活動に参加する形で、保存会などと連携して指導を行う事例
- (3) 演奏家団体による鑑賞教室的な形で指導を行う事例
- (4) 音楽の教師による指導
 - ①音楽教師が伝統的音楽の研修を行い直接指導する。
 - ②鑑賞などのスタイルを中心として指導する。

言うまでもないが、このような指導類型はその学校の地域性や教師の熱意などと深

く関係している。

4. 特徴的な事例

上記3-(4)に関連して、特徴的な事例がさまざまな地域で見られることが明らかになった。日本の伝統的な音楽指導においては、教師の指導力量とともに児童・生徒が使用する楽器の確保が重要な課題となる。こうした中、楽器を手作りするという特徴的な指導事例がいくつか見られた。

沖縄の例では手作り三線、鹿児島の場合には、手作りの薩摩琵琶、また手作り尺八による指導事例は全国的に多く見られた。これらの楽器制作については、身の回りの材料を使用して行われもの（たとえば缶をつかった「かんから三味線」、エンビ管を使った尺八等）と同時に、教師自身が図面を作成し、かなり本格的な楽器を安価に大量に生産するという事例もあった。こうした教師が研修会などを通してネットワークを形成し、安価で本格的な楽器づくりの情報が交換されていることも、これからの伝統的な音楽指導を考える際に重要な視点となりうるであろう。

5. カリキュラム構成への視点

日本の伝統的な音楽指導のカリキュラム構成へむけて、先にあげた4つの類型はそのまま視点となりうるものである。

こうした視点でカリキュラムを構成しようとする際、とくに重要となるのは、地域とのかかわりである。先の類型(1)にしても類型(2)にしても、地域との連携が不可欠となる。また、三線や薩摩琵琶といったように地域性のある楽器の手作りに関しても、地域と連携することが重要であることが明らかとなった。

こうした中で、先の類型(2)にも関連して、地域の民俗芸能保存会などどのように連携していくのかが今後の伝統的な音楽指導を考える際重要となってくる。たとえば北上市では、伝統的な民俗舞踊、音楽として「鬼剣舞」(おにけんばい)が保存されている。夏祭や東北地区芸能祭等には各地区の鬼剣舞が多く参加する。市内の幼稚園、小中学校では運動会のプログラムに取り入れられたり、また学校を中心として鬼剣舞のクラブをつくり、授業とも関連を持たせつつ、地区の保存会とも連携をとりながら芸能を伝承するというも行われている。学校での剣舞が夏のまつりに参加することで子どもたちのモチベーションが非常に高まっていると言われている。盛岡を中心とした「さんさ」等についても同様の取り組みが見られる。全国で見ればこうした取り組みは数多く見られる。

伝統的な音楽の指導を考える際、地域の町おこしも連動しながら、学校に閉じこもることなく、学校と地域とが共同的にかかわっていくことが伝統的な音楽指導のカリキュラム構成へ向けての視点となりうるということが出来る。かりに地域に伝統的な芸能が存在しない地域にあっても、町おこしなどと連動しながら新しい地域の伝統音楽を創り出す運動とかかわって伝統的な音楽指導を考えていくのもひとつのあり方である。実際に、こうした動きは多くの地域で見られるようになってきている。